

## エッセイ

## 小特集 「元号を考える」

二〇一七年二月八日、今上天皇（おそらく来年からは平成天皇）の退位日を二〇一九年四月三〇日とすることが閣議決定され、一三日に政令として公布された。翌五月一日に皇太子が即位するとともに、平成に代わる新元号の使用が始まる見込みで、新元号は事前に二〇一八年中に発表される予定とのことである。明治改元時に一世一元制を取り入れ、『皇室典範』で天皇崩御時の皇嗣即位の規定が設けられて以来、改元の機会は制度的に、天皇の崩御時に限定されてきた。だがこのたび今上の希望を受け、生前退位が特例的措置として認められたことで、崩御・即位によらない改元が行なわれることになった。これまで一世紀半、改元は天皇崩御とともに突如訪れるものだったのであり、今回の改元スケジュール事前告知は、明治以来の日本人にとって初めての体験である。

元号の特色は、国家が一定頻度でこれを改め、年のカウントを1に戻す点にあり、無限のカウントアップを前提とする西暦やヒジュラ暦とは原理を異にする。今の日本は国家規模での年数リセットを体験できる、世界的にも稀有な国である。元号制度はかつて漢字文化圏で広く行なわれ、日本では七世紀から（継続的制度としては八世紀から）採用されたが、一九四五年に保大（大越国）と康徳（満洲国）が廃されてからは、日本にのみ遺存するものとなっている。かくも根強く用いられ続けてきた元号は、日本の社会や文化を考える上で、一つの素材になる

ものだろう。そこでこのたびは明治以来初となる「予告された改元」を迎えるに当たり、本誌で元号をテーマとした小特集を組むことにした。来年のリセットを前に、元号を考える手がかかりになれば幸いである。

榎本 渉（国際日本文化研究センター准教授）